
白銀の鎧と黄金の剣

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の鎧と黄金の剣

【Nコード】

N3483Y

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

主人公がヒロインと出会い、そこからさまざまな事件に巻き込まれる話です。色々な神話や伝説の武器やらが登場します。楽しんでもらえれば幸いです。

プロローグ（前書き）

どこかパクリ臭のような物がしても、どうか気にせずに読んでください。

プロローグ

神話——それは様々な神や英雄などが生き、そして散って行つた世界。

その力は人間界に生きるあらゆる生物にちりばめられた。その力は様々な者によってふるわれた。だが、その力を持つ者は人間だけではなかった。

馬や狼などの生物もその力を持った。だが、その多くはある理由により死んでいった。それは——暴走だ。そもそも、この力は神などの上位種がふるっていたものだ。それを生物がふるうのはおこがましいという事なのだろうか？

それを見かねたある男はとある組織を作り上げた。
その組織の名前は『神にはむかう者達』 フェンリル

プロローグ（後書き）

初めて書いた作品ですので、どんどん問題点を教えてもらえるなら幸いです。

これから、いろいろとよろしく願います！

世界は始まりを奏でる（前書き）

取り敢えず始めてみました。プロローグは意味不明かもしれませんが、どうかご容赦ください。

世界は始まりを奏でる

ある陽気な日に仕事場をのぞいてみると、支部長に呼ばれているということなので俺こと、乾慎也は通路を歩いていた。

神にはむかう者達（ここからはフェンリルとする）は、本来各地で勃発する犯罪とかに駆り出されている。ま、ぶっちゃけ警察の裏組織的な？そんな感じだ。

だから支部長に呼ばれるなんてことはめったにない。仕事をさばっていない限りは。

コンコン――

「乾です。支部長、入室してもよろしいですか？」

「構わんよ。早く入りたまえ」

自分で呼び出して、何言っただ？あの爺は。もう年なんだから退職なりなんなりすりゃいいのに。もちろんそんなこと一切口には出さなかったが

「失礼します。それで支部長、どんな……御用……でしょうか……？」

後半とぎれとぎれになったのは、綺麗で可愛い女性がソファに座っていたからだ。あれ？おかしいな。幻？そんなわけないか。紅茶飲んでるし。その女性の髪は黒色だが、その眼の色は黒ではなく、金色だった。ハーフってやつかな？

「支部長。娘さん……いや、お孫さんですか？」

それならまだぎりぎりわかる。というか、それ以外に何があるんだ？

「何故そこで依頼者という考えが出んのだ？孫が来ておるなら、おぬしなんぞ呼ばんわ」

「やかましいぞ、クソ爺。文句があるなら、俺はほかの任務を受けるだけだからな」

うわ、しまった。つい癖でいつもの調子が出てしまった。俺が呼び出されるときは、たいてい普通の話し合いにならない。なんせ位の違いなんぞ関係なしで悪態つくからな。俺が女性の方に視線を向けてみると、顔をそむけて笑いを堪えていた。そんなに面白いか？

「真由美君、そんなに笑わんでもいいじゃろうに。わし、今すぐく傷ついとるぞ」

「申し訳ありません。あまりに二人のやり取りが自然すぎて……くっ」

まだ笑ってるよ。さすがに受けすぎじゃねえ？

「爺、あんたに繊細な心なんかあるわけないだろ。ついこの間呼ばれたときだって、あんた確かギャルゲ……」

「あー、あー聞こえない聞こえない。何のことかわしや知らんぞ」

ナチュラルに否定しやがったよ、この爺。ま、そりやどうでもいいんだが。それよりも大切なことがあるしな。

「それで？俺に依頼って何なんだよ。別に俺じゃなくなたって頼める

やつはいくらでもいるだろ？」

俺は支部長の隣のイスに座りつつ訊いた。

「おお、良く訊いてくれた。だが、その前に自己紹介といこう。

乾。こちらの女性は組織のとある役職に就いている、神崎真由美君だ。

真由美君。このいけすかない男は、組織でもSランカーの腕利きの男じゃ。安心してくれ」

「そうですか。それでは改めてはじめまして、神崎真由美と申します」

「こちらこそはじめまして。乾慎也です。どんな依頼にしろ、よろしく願います」

「あら、受けないという選択肢はないんですね。期待できそうです」「どんな物であれ、とにかくやり抜く。それが俺のポリシーですの。それで爺、依頼って何なんだ？そんな風に固まってないで教えてくれよ」

爺はなんかしらソファで丸まっていた。気持ち悪っ。

「こほん。依頼というのは、彼女、真由美君の警護をしてほしい、という事なんじゃ」

「は？」

おおっと、何か分からんが不吉な空気が漂ってきたな。どうしようかな？

世界は始まりを奏でる（後書き）

第二話、出してみました。今のところ読まれておられる方はいらっ
しゃらないようですが、頑張りたいたのでよろしくお願いします！

護衛の始まり（前書き）

第三話です。できるだけ定期更新しようと思いますが、用事でできなくてもご容赦ください。

護衛の始まり

「仕方ないな。俺は別にかまわないよ。でも、まさか俺だけにやらせるわけじゃないよね？」

「当たり前じゃろ。いつもの二人を連れていけ。あれでも一応は^{ダブ}アラ^{ルエー}ンカーじゃ。役には立つじやろ」

それはもうあっさりと承諾した。正直な話、たかが護衛でAアラ^{ルエー}ンカー以上を三人も必要とする任務。一体どれだけ危険なのか、気になるという点もあつたがそれよりも重要なのは――

「特務なんだろ？これは」

「支部長直々なんじやからそうじやろ。そんなこと訊かんでもわかつていると思つとつたんじやが」

特務――要するに支部長、または本部から直々に送られてきた任務のことを指す。一応ここは日本支部。一応というのは、本部という物がぶつちやけ存在しないからだ。総局長が滞在している場所が、その時々^の総本部になる。いったい今はどこにいるのやら。

「それじゃあ、行くとしようか。準備はいいですか？」

「ええ、私は構いませんが……いいのですか？そんなに軽々しく受けてしまつて」

「そんなこと気にしなくても大丈夫ですよ。こんなクソ爺からとはいえ、一応特務ですから。受けないわけにはいきません」

「そうですね……。まあ、貴方がそれでいいのならいいんですが」

なんか遠慮気味だな。彼女が依頼を持ってきたんじゃないのか？それとも、彼女が何か重要な役割を担っているのかな？まあ、それ

は置いて。仕事をするとするか。

俺と神崎さんは支部長室を退出した後、任務の話をしていた。どうやら彼女を隣町のホテルまで護衛する、という任務のようだ。思ったよりたいした任務じゃないいな。でも、それなら特務指定にされるわけがないし……まあ、いいか。悩むとか面倒だしな。俺は神崎さんを待合室に待たせて、受付に向かった。

「花音ちゃん。ちょっといいかな？」

「はい？ あ、慎也さんじゃないですか。どうかしたんですか？」

この子は達宮花音^{たつみや・かのん}ちゃん。フェンリルで受付嬢をやってる元気な女の子だ。髪は明るい橙色。受付嬢というよりは、外で元気で遊んでいた方が似合っている女の子だ。基本的に任務の発注などをやっている。

「あの二人組の馬鹿がどこにいるか知ってる？ ちょっと任務に連れて行きたいんだけど」

「ああ、それでしたら先ほどお見えになるって——」

「誰が二人組の馬鹿だって？」

声のした方向を振り向くと、そこには男女二人が立っていた。俺が探していたやつらだ。

「お前らのことだ。っていうか、お前ら遅刻だぞ。もうすぐ昼時だぞ。また仲睦まじくやって遅くれたのか？」

「ちげえよ。今任務が終わって帰ってきたところなんだよ。それで俺らに何か用なのか？」

「そうだと言ってるだろう。月花、なんかやけに眠そうだな。またなんかしてたのか？」

「違うわよ！ただ恥ずかしいから顔を伏せてただけ！どうしてリーダーはいつも私たちをそういう目で見るわけ！？」

「そういう風に見えるからに決まってるだろ？ところでお前ら、任務だぞ。昼食を奢ってやるから手伝え」

「マジで！？行く行く！いやあ、腹減ってたんだよな。旨い店を頼むぜ？」

「食い意地張り過ぎよ、卓也。まあ、おなか減ってたのは本当だけどね」

この二人は俺が組んでるチームの二人、六道卓也ろくでつたくやと黒市月花くろいちげつかだ。一応AAランカーだ。

ランカーの位は、Fを順当にE・D・C・B・BB・BBBと順番に増えていく。もちろんCからはプラスとマイナス判定も付く。まあ、Fから始まる輩で続くやつは少ない。

Fの地位はいわゆるなんでも屋みたいな雑事ばかり任せられる。そこで俺たちが守るべき市民の事を知るという意味も含まれているからだ。俺はそのFランクから始まった数少ない逸材なんだけど、ね。

「それじゃあ、護衛の相手を連れてくるから。車をとってくる間守っててくれよ？」

「え？任務って護衛なの？」

「ああ、それじゃあ迎えに行ってくるわ」

俺が待合室にいくと神崎さんは何かの本を読んでいた。あれはイギリス英語で書いてあるから、イギリスの本かな？さすがに内容とかはわからんけどさ。

「神崎さん、人の用意はできたんですが動けますか？」

「あ、乾さん。はい、大丈夫ですよ。それでその人は？」

「移動ついでに自己紹介させますので、付いてきてもらっていいですか？」

「そうですね。お願いします」

俺と神崎さんは、ホールに出て入口の所で待っていた二人のところにまでいった。案の定二人はきつちりとした感じになっていた。いつもはふざけているが、仕事はまじめに取り組む奴らだからね。

「それじゃ、俺は自分の車をとってくるんでここで待ってもらえますか？護衛はこの二人に任せるので」

「それは構いませんが。大丈夫なんでしょうか？」

「？……ああ、車の事ですか？それなら大丈夫ですよ。一応狙われでも大丈夫なようにコーティングはしてありますから」

「わかりました。それではここで待っているとします。それでは護衛、お願いしますね」

「はい。ちゃんと守り抜いて見せますよ。だからできるだけ早く戻ってきて」

「はいはい。まったく、台無しだな」

俺は車を取りに駐車場の方に向かって歩き始めた。

護衛の始まり（後書き）

いきなりお気に入りにしていただいた方もいるようで驚きです。その期待に頑張っただえようと思います。それでは、また明日。

力の片鱗

俺が駐車場に到着すると、そこには一般人の格好をしているがその実力は少なくとも、Bランク以上の実力はあるだろうという気配を漂わす奴らが十人以上いた。その中の最も強い気配を放っていた男がこちらに向けて歩いてきた。

「先に訊いておきたいことがある。お前はあの女とどういう関係なんだ？」

「どういう関係ってなんだよ。俺と彼女はただの護衛と護衛対象っただけだ。それより、あんたらも同業者だろう？何故彼女を狙う？いくら認可されているとはいえ、一応罪にはなるんだぞ？」

「こちらも依頼なのでな。仕方がないのだよ」
「そうかい。こんな大量の人員を雇えるってことは相当の金持ちだな」

俺達の会話をしり目に、ほとんどの奴らは俺を囲んでいた。そしてナイフや銃をこちらに向けて構えている。俺がそれを分かっているだろうに動かないでなおも喋っているのがじれったくなつたのか、一人の男が俺に向かってきた。それに釣られて十人近くの間人間が動き出した。

「やめろ！勝手に動くんじゃない！」

リーダー格の男はがそう叫ぶと、全員の動きがぴたりと止まった。いい統率力だ。だけど、それはやつちやいけない選択だったよ。俺は片足を思いつきり上げ、思いつきり地面に叩きつけた。

叩きつけた足で地面を揺らしそこにいた奴らを行動不能にした。そしてその足で動いた十人を包み込む程の魔法陣を展開し、その陣

に魔力をつぎ込んだ。揺れが問題ないほどになる頃には、もう術は完成した。

「グラビティセカンド フォーチュン
重力術二式・輪環」

その陣から発生した普段人間が浴びている重力の約二十倍もの重力をたたきつけた。もちろんそんな物を浴びた連中は十秒と持たず肉塊、いや肉片も残らず消えた。まだ生き残っているのはリーダー格の男と、四人だけだった。

「……さすがは護衛を任されただけの事はあるな」

「お褒めに預かりどうも。でももったいないことをしたね。俺に挑むなんて愚を犯さなきゃ、まだ生き残っていられただろうに」

「そのようだな。さすがにこれは引かざるを得ないようだな。最後に教えてくれ。君は一体何なんだ？」

「へえ、さすがだね。あれが見えたんだ。いいよ。教えてあげよう。あれはな——」

フェンリル
神喰狼だよ

俺がそう告げると、男たちは顔色を変えた。俺はそれを無視して、自分の車のところに行きエンジンを動かした。そして俺が男の隣を通り過ぎようとしたところで、男はぼそりと呟いた。

「その力は、いつか君すらも喰らうことになるだろう」

「それぐらいこの力を受け継いだ時から覚悟しているさ」

俺はそのまま車を動かし、駐車場から出て行った。

力の片鱗（後書き）

第四話です。昨日は更新できず、すいません。それでは、またいずれ。

車の中で

「ほい、到着つと」

「リーダー、車取りに行くだけでこれは時間かかり過ぎですよ」

俺が入口の所に車を置くと、早速文句を言われた。時計を見ると
——うわ、十五分も経ってんじゃない。確かにこりや時間かかり過ぎだ。

「まあいいじゃん。どうせ襲われてたんだろ？なんか地面の揺れを感じたし、震脚でも使ったんじゃないの？」

「まあね。大した実力はなかったけど。どこかのチームを雇っただけで、実力は測ってなかったんだろうけど。弱かったよ。術でほとんがが一撃死。拍子抜けだった」

説明していなかったが、フェンリルというのはギルドみたいなもので雇われればなんでもするなんでも屋だ。雑務から探検、暗殺などなんでもござれ。だけど、護衛なんて物を任されるのは大体特務だけなんだけど。普通護衛なんて物を頼む奴には専用のSPがいるからね。

「いや、すみません。待たせちゃいましたね。どうぞお乗りください」

俺が助手席の扉を開いて神崎さんに手をのばすと、神崎さんは力バンの中をあさっていた。

？何を探してるんだろ？少しを待っていると、出した物はハンカチだった。ハンカチ？何故に？そう思っていると、神崎さんはそのハンカチを俺の頬にあてた。

「あの？何かありました？」

「リーダー、血が付いてたんだよ。それで怪我したんじゃないかと思ってるんじゃない？」

「え？違うんですか？」

「違いますよ。この血は返り血です。俺に怪我を負わせることなくで、そうそうできませんから」

「うわ、傲慢。でもそんなところが痺れる！」

「はっはっは。褒めるな。まあ、どうでもいいんだけど。まあ、その、ありがとうございます」

「いえ、これ位どうということはありませんから」

「リーダー、そろそろ行こうぜ。俺腹減っちゃまってさ」

「お前、いろんな意味で台無しにしてくれるよな。構わないけどさ。それじゃあ、乗って下さい」

俺は運転席、神崎さんは助手席。それに残り二人は後部座席に座った。俺の車はワゴン車だ。説明し忘れたから言っておく。そして車は動き始めた。

「そういえば、この車対策とか大丈夫なんですか？」

「何がですか？……ああ、狙われないかってことですか？それなら大丈夫です。この車は幻影色ですから。それに対魔法・魔術の素材でもできてますし」

「幻影色……ですか？」

「あれ、知りません？そんな有名じゃないのかな？」

双眼鏡とかそういう媒体を使っても、こちらの事はわからないようにする物です。大体の人間は常識を持っていますから、人が多くいるような場所で撃ってきたりはしません。

まあ、撃ってきて俺の重力操作で捻じ曲げますがね」

「リーダーって、ホントに容赦ないからね。どうせ駐車場で戦った

相手だつて重力で押し潰したんでしょ？」

「だっていちいち相手にするの面倒だし。大体知ってるだろ？俺は光と闇の術式以外が苦手だつて」

「知ってるけどさ。なんか無残じゃない？」

「そんなもん知るか。挑んでくるんだから相対するしかないだろ？全く話は変わりますが神崎さん」

「はい？何でしょうか？」

「後ろの二人が腹が減ったとうるさいので、目的地に行く前に俺の行きつけの店で昼食をとつてもいいですか？」

「はい、それぐらいなら構いません。私もお腹は空いていますし、ね」

返答を聞いた俺は、俺の行きつけの店『カナリヤの涙』に向かった。

車の中で（後書き）

第五話です。主人公ちよつと傲慢ですけど、飽きっぽいです。どうでもいい情報ですが。それではまた今度会いましょう。バイチャ！
(> | <) /

カナリヤの涙

俺たちは『カナリヤの涙』に到着した。『カナリヤの涙』は隣町との境にある、小さい店だ。俺は駐車場に向かつて、車を止めて助手席を開けようとした時にそれは飛んできた。光の槍が。とっさに闇の術を手に展開し受け止めた。その方向をみると、先程のリーダー格の男が立っていた。同時に後部座席の二人も降りて、助手席を開けた。いくら対魔術に優れているといっても限度がある。避難させた方がいいと判断したんだろう。だけど、神崎さんは動こうとしなかった。まるでこれから始まる戦いを片時も見逃さないようにしているかのように。構わないんだけどさ、無鉄砲な人だ。

「面倒だな。なあ、まだ追いかけてきたのか？もう無駄だと悟っているだろうに」

「無理だと理解はできても、諦める訳にはいかないんだよ。しっかし、それだけの光を片手で止めるのか……。やっぱり化け物だな」

「当り前……と言いたいところだが、これは神喰^{フェンリル}狼の力は関係ない単純に闇の術式で光槍の表面を削ってるだけだ」

「そんなことをさも当然にやってのけるところが、すでにあり得ないって……」

「俺の前に出てきた、って事は死ぬ覚悟はできているな？お前には特別に見せてやろう。主神を喰らった神狼の力をな」

俺は腕を交差させながら呟き始めた。神狼は今ここに顕現される。俺の右手に刻まれた十字架の刻印が輝き始めた。白銀の色に。

「フェンリル、久しぶりにお前も戦えそうだなぞ？暇つぶしぐらいになるんじゃないか？」

『それは楽しそうだ。ここ最近の敵は暇つぶしにもなりはしなかつ

たからな。せいぜい期待を裏切るなよ？人間』

交差の手をほどくと、白銀の光は頂点に達し光が消えると宝石の結晶が俺を包み、次の瞬間には俺の体を白銀の鎧が包み込んだ。そう気高き孤高の狼の毛皮を纏ったかのように。

「それがフェンリルか。予想外だよ。結構普通なんだな」

「ははは。まあ、見た目はな。だけど、伊達に神狼と呼ばれてるわけじゃないんだぜ？」

俺は一気に動き始めた。俺の右手の刻印の正体はグレイプニール。北欧神話において、フェンリルを縛っていた魔法の紐だ。ある意味で、こいつは対神用の生物だ。その身体能力は尋常じゃない。少なくとも眼で追うなんて不可能なほどに。ま、フルパワーには程遠いんだけど。

——ゴウッ！！！！

俺の拳は顔面を狙っていた。それにぎりぎりで気がついたのか、横に避けるともものすごい音が鳴り響いた。空気を殴ったことで、拳の威力は衝撃波になって周りに散らばった。

「外したか。やっぱ四分の一の出力じゃ避けられちまうか。ほとんどの奴はこれで十分なんだけどな」

「怖ええよ。なんだその威力。回避した拳の攻撃が衝撃波に変わるとかどんなんだよ！」

「神狼だぞ？それぐらい当然だろ。今度こそ当ててやるから、まあ味わってみろって」

「こらー！店先で何やってんの！ここは戦う場所じゃなくて、ご飯を食べる場所でしょうが！」

もう一度拳を構えて動き出そうとした俺たちに怒声が響き渡った。
この声は……オーナーか？

その方向を見てみると、エプロンを構えた女性が腰に腕を添えて立っていた。おお、結構さまになってる。

「慎也！今すぐ戦うのやめないと、昼飯抜きにするよ！」

「うわっ！それは勘弁して下さいよ！」

俺は勢いもなくなったし、しぶしぶ鎧を解いた。相手も拍子抜けしたのか戦う態勢をやめていた。ここに充滿していた戦いの雰囲気はなくなった。

「それじゃあ、いらっしやいませ！『カナリヤの涙』へようこそ！」

そんな俺たちを迎えたのは満面の笑みを浮かべたオーナーの姿だった。

カナリヤの涙（後書き）

そんな訳で第六話です。お気に入り登録も増え、感謝です。これから
もよろしくお願いします。それでは、ばいばい。（>|<）ノ

説教と談笑（１）

「それで？なんでまた店先で暴れてたわけ？」

「いや、俺は率先して暴れたわけじゃねえよ。ただ襲われたから自衛権を行使しただけ。これ以上文句を言う気なら、法律の方に言ってください」

俺は正座の姿勢で詰問されていた。うう。俺は何もしてないのに。というよりも俺のせいじゃないのに。

「お黙りなさい。あんた神喰^{フェンリル}狼の力を開放してたでしょうが。知ってる？そついうのを過剰防衛っていうのよ。それとあんた」

「ああ。なんだ？罰ならいくらでも受けるぞ。甘んじてな。俺が悪いのだから」

「あら、結構潔いのね。これは忠告よ。あんた見たところ、ＡＡランカーでしょ？その程度の実力でこいつに挑もうなんて愚の骨頂よ。金輪際こついう事が無いようにしなさい」

「え？何その扱いの違い。俺ひよつとして嫌われてんじゃねえの？」

「あら、そんなことはないわよ？ただあんたと一緒にいると、あんなの事いじめたくなってくるのよね。偶に」

「うわ、ドＳだ。ここにドＳがおるわ」

「失礼ね。ま、いいわ。それで昼は食べて行くんでしょ？さつさと注文してよね。それともいつものでいいの？」

「うん。いつものでいいから、立ってもいいか？そろそろ足が……つていうか、なんだよこの石は！どんな拷問の風景だよ！」

ちなみに神崎さんと卓也と月花はこちらを苦笑しながら見ていた。俺と男の膝には十五枚ほどの板状の石があった。重てええええ……！

「ああ、もういいわよ。お疲れ様」

オーナーこと、花道楓^{はなみちかへで}さんは、俺たちに乗っている石の天辺に触った。すると全ての石が砕けちった。あー、足が痛い。

「それじゃ、料理を用意しとくからおとなしくしときなさい。暴れたら、シバキ倒すからね」

「そんなことしないよ。疲れたから、早めお願い」

「はいはい」

俺が席に戻ると、早速卓也が話しかけてきた。こいつのテンションに付き合うの、偶にだけど面倒なんだよな。

「リーダー、あの人とどういう関係なんですか？ずいぶん親しげでしたけど！」

「昔から世話になってる人だよ。それ以上もそれ以下もない」

「なんだ。面白くないな」

「お前を喜ばせなきゃならん道理はない。それで神崎さん、こいつの処遇はどうします？」

さつきから黙って座っている男——確か、白鷹だったかな？フルネームを公表する気はないみたいだけど。全員の視線が自然とその男に集まった。もつと肩身狭くなつたみたいだけど。神崎さんは淡く微笑みながら、白鷹に話しかけた。

「白鷹さん？あなたはこれ以上私たちを襲う意思はありますか？」

「ない。神喰^{フエリル}狼の力は把握した。これ以上挑んだって己の命を捨てるだけだからな」

「それなら構いません。無用の命を捨てる必要はありませんから」「そうですか。いつもなら甘いと切り捨ててしまふところですが、

依頼主がそういうならいいでしょう。俺は何もしません」

「リーダー、この人の仲間に何の術を使ったんですか？」
フォーチュン

「輪環だ。全体攻撃用の魔法。重力系統のな」
グラビティセカンド

「重力二式ですか？そりゃあ、ご愁傷様ですね」

「上下左右から通常の二十倍ほどの重力を叩きつけ、体を微塵も残さずに潰すつつう技だからな。そりゃあ、痛みも半端じゃなかっただろうな」

魔法や神話系統の物が全世界に明らかになって早二十年。2038年現在でも、魔法などの技術で新たな素材ができている。

魔法は四系統・炎・水・土・風に加えて、二系統・光と闇つまり六系統で構成されている。俺が得意な術は闇と光の攻撃系の魔法。回復は全くと言っていいほどできない。

フェンリルができて、俺たちのような力を継いだ者は光を見ることができようになった。俺達は言ってみれば、異能者つまり異常の塊みたいなもんだ。力事態は太古から存在した。だが、たいていの奴は迫害される。当たり前だ。こんな気味の悪い力を持つ奴と一緒ににいたいと思う奴がいる訳がない。

「お二人もやっぱり神話武器ゴッドウエポンを持ってるんですか？」

「俺たちは持ってません。俺たちの得意武器は、刀と槍なんですけど。職人のオーダーメイド品なんです。材料はわざわざリーダーが取ってきてくれたんですよ？」

「すごいですね。ちなみにその素材って？」

「刀の方は、アジ・ダハーカの牙。槍の方は神話世界にのみ存在する鉱石です」

「……………え？」

さてはていったいどんな反応をしてくれるのやら、楽しみだな。

説教と談笑（１）（後書き）

そんなこんなで第七話。今回と次回は、一応説明不足の部分の説明する回にしたいと思います。それでは！

説教と談話(2)

「えええええー！アジ・ダハーカってあれでしょう？
大洋の底の方に封印されていて、世界の終末に人類の約三分の一を
殺す、っていう伝承持ちの竜でしょう？」

おお。やっぱり凄いリアクションだな。俺は微笑を浮かべながら、
ダージリンティーを飲んだ。ここのお茶って美味しいんだよな。そ
んでサンドイッチを食いながら説明を続けた。

「ええ、そうですよ。あとちょっと訂正で。確かに伝承では海の底
が高い山に縛られている、となっています。でも、実際は異世界を
泳いでるだけですから」

「でもリーダー。三分の一の人を殺す、なんて伝承を持っている竜
と交渉してくるのは世界広しといえども、リーダーと魂持ちの人た
ちだけだと思うよ」

魂持ち——名前の通り、各神話の英雄や神様の魂をその
身に宿す人たちの事だ。その人たちは、魂を宿すことでその者が使
っていた武器——ゴッドウエポン神話武器を使う事が出来る。

でも、そうではない人もその力を継ぐことができる。『継承』と
か色々あるけど、ほとんどの奴らは因子持ちだ。

その武器をふるうのに必要な因子を持っていれば、誰でもふるう
事が出来る。でも、神や英雄の武器だ。そう簡単に振るえる訳がな
い。そこで開発されたのが伝説武器——ミスティックウエポン。

「それで、どうやってアジ・ダハーカの牙をもらったんですか？」
「簡単ですよ。俺が生きている間に世界の終末が起こった時、俺は
アジ・ダハーカに手を出さない。その代わりに、牙を一本もらっ

そういう契約です」

「アジ・ダハーカも神喰狼^{フェンリル}は障害にしかないだろうしね。ひよつとしたら一人の人間も殺さずにリーダーと出くわして、よくて重傷、悪くて死亡するかもしれないからね」

「それは……そうかもしれないませんが。でしたら乾さんは遭遇しても知らんぷりする、という事なんですね？」

「そうですが。何か問題でもありますか？」

「問題って……」

あれ？ちよつとあっけからんとしすぎたかな？するとさつきから黙りこくっていた白鷹がしゃべり始めた。おお、やつとか。

「それで、神話世界の鉱物とは何なんだ？神話世界に入ることができるのは、相当地位が高い者だけだと聞いていたんだが……」

「俺は創始者の知り合いだからな。そのツテもあるけど俺は一応、神喰狼^{フェンリル}だからな。あそこの掟は『すべて自分で対処せよ』だからな」

「そうなのか。というかこの硬度、なんか覚えが……ひよつとしてこれ、オリハルコンか？神話世界でもめつたに見つかからないっていう、あの？」

「ははは、正解。オリハルコン事態は別に珍しくない。でも、発見されるのはもう焼け野原になった場所がほとんどだ。そういう場所にはいるんだよな。魔獣の類が」

「なるほど。力を制御されている者とは違い、己の力を理解しているから、か。ちよつと銃だけを持った人が虎に挑む感じか？」

「そうそ。それで俺がとある場所で見つけた、ってわけ。それを知りあいの鍛冶屋に持って行って槍にしてもらったってわけ。わかったか？」

「私たちがAランカーになったお祝いって事でくれたんだよ。あの時は驚いたね。一級武器も有象無象の類に見えるほどの武器が、目の前にあつたんだから」

「リーダーって周りには優しいよな。こんな上等な物まで用意してもらっちゃってさ」

「俺はそんなのなかったからな。せめて周りの奴には、と思っただけさ」

事実、俺がSランカーになろうと褒めてくれる奴なんかいなかった。こいつらを除いたら。話が一区切りついたところで周りを見てみると、全員が食い終わっていた。

「それじゃあ、そろそろ行きましようか」

「はい、そうですね。それでは、お金は――」

「俺が払つときますよ。このぐらいの出費全然痛くありませんから」

「でも、やはり依頼主としてここは私が払った方がいいでしょう」

「大丈夫ですよ。リーダーの貯金見たら、たいていの物取りは盗みをやめるレベルだから」

「そうだな。なんせ貯金が億いつてるからな。ここの値段はお手頃だし全然痛くないだろ」

「そういうこと。それじゃ、神崎さんを車まで運んどいて。それで白鷹、お前どうするんだ？」

白鷹はとつと扉を開いて出て行くこうとしていた。はつきりとした性格だな。俺が呼びかけると足を止め俺の方に寄ってきた。俺は精算を済ませて歩きながら話をした。

「何がだ？いつもの通りの生活を送るだけだが」

「お前を雇ったのは大金持ちか、相当の家柄の人間なんだろ？普通に考えて、何かしらの圧力が掛かってるとみて間違いない」

「それでも仕方ないだろう。本来、任務に失敗するという事は同時に死を意味しているのだから」

「お前、俺らのチームに入れ。俺に挑んでくるその根性、気に入っ

た。俺らのチームに入れば、それなりの報酬は保証するぜ？なんなら、お前のチームごとはいってもいい」

「……二、三日時間をくれ。こんな話、俺一人で決めるわけにはいかない。生き残ったメンバーと話し合って決める」

白鷹はそう言って自分のバイクに乗って、どこかへ走り去って行った。これでよし。俺は自分の仕事に戻るとしようかな。そう思いつつ、俺は三人の所に駆け足で急いだ。

説教と談話（２）（後書き）

自分が思っているより読んで頂いていた方がいたことにビックリです。ありがとうございます。感謝感激雨あられ状態です。これからもがんばっていきますのでよろしく願います！（＞|＜）ノ

護衛の終わり

道中は特に問題なく、（太陽が暖かくて眠りかけたのは秘密だ）車に二時間ほど揺られて隣町に到着した。むしろ何の障害もなくて拍子抜けしたぐらいだ。

ホテルの前に到着すると、数名のホテルマンの人が立っていた。まあ、予約ぐらいはしてるよな。俺はその前で車を停めて、助手席の扉を開けた。

「それじゃあ、これで任務は完了って事でいいですか？」

「ええ。ここまでありがとうございました。怪我などはありませんか？」

「あるわけありませんよ。それでは、目的はわかりませんがここでの滞在をお楽しみください」

「……よくわかりましたね。私が日本に住んでるわけじゃないって事」

「うーん、なんていうんでしょう？こう、全体の雰囲気のような物がこの国とは違うつていうのか。まあ、そんな感じです」

「そうなんですか。それじゃあ、はい」

神崎さんは俺に向かって右手を差し出していた。？これはどういう事？外国風に口付けでもしろ、ってことか？いや、違うな。これはひょっとして……。

「こう、ですか？」

「はい」

やっぱり握手か。そう安心して、握手をしたとたん俺（多分神崎さんも）の頭に何かがほとばしった。そして、一瞬だけ神崎さん

から黄金の剣のようなものが見えた。俺たちは同時に手を離し、己の手を見つめていた。あの姿は一体……？

「お嬢様、もうよろしいでしょうか？ さすがに九条様もくたびれていらつしやるでしょうし……」

「……そうですね。それでは爺、彼らに部屋を用意して差し上げて」「そこまでする必要はありません。言うほど働いてはいませんしね。俺たちはこれで失礼します」

俺がそう言つて車の方に戻ろうとすると、あの二人がいらん事を言い始めた。

「ええ、泊まっていきましょうよ。せっかく神崎さんもお厚意なんですし」

「そうですね。こんな時以外、この町に来たりしませんよ？ 思い出作りに、ね？」

「ね？ じゃねえよ。こういう時は遠慮しとくのが筋つてもんだろ」

「いえ、せっかくですしお願いします。お嬢様の顔を立てると思つて」

「……それなら一般客用で三人部屋を一つか、二人部屋を二つお願いします」

「かしこまりました。君達、お嬢様をお部屋にお連れしておいてくれ」

「「かしこまりました」「」」

そういうと、そこには俺たちを除くと誰もいなくなった。俺的にはとつと帰りたいかつたんだが。

「そつえばリーダー、この後暇だったら俺の修練の相手して下さいよ」

「え、ずるい！それなら私も、私もしてよリーダー！」

ひとまず、修練ついでにこの調子に乗った二人もシバクとしようかな。

護衛の終わり（後書き）

はい、よくわからないかもしれませんが護衛もなんだかんだで終了。これからだんだんと面白くしていこうと思っていますので、乞うご期待。

修練

そしてホテルの一室に着いた俺たちは、荷物を置くとすぐにフロントで修練用の場所がないかどうか聞きに行った。

「それでしたら、裏庭は素振りぐらいのスペースはありますよ。それでもよろしいでしょうか？」

「それでかまいません。ありがとうございました」

俺たちはすぐに、裏庭に歩いて行った。そこには模擬戦闘にもってこいの広さがあった。確かに素振りだけのスペースと言えるだろう。

「それじゃあ、模擬戦を始めるから準備をしとけ。といつても柔軟運動程度だな。俺は結界を張っておく。周囲に影響を与えないようにな」

「はい」

二人が柔軟運動をしている間に、俺は結界を張るためにぎりぎりの所に四枚の札を張りに動いた。四端にある木に張った。そして札に魔力を流し込み、結界を完成させた。よし、これで終わり。

「これでよし。それじゃあ、そろそろ始めるぞ」

「それで武器はどうするんです？まさか素手でする訳じゃないですよね？」

「当たり前だ、武器はこれ。世界樹の枝から作られた剣と槍。これなら存分に振り回せるだろ」

「了解。ところでこれ、どんな結界なんだ？影響を与えないって言ったってどうやって？」

「この部分だけを異界につないだ。つまりいくら振り回してここを傷つけても、現実世界に影響は出ない、というわけだ」

二人に剣と槍を渡して、俺は二本の木刀を構えた。素手による近接戦闘は俺の得意分野だから、ひよつとしたら間違えて二人の武器を破壊してしまうかもしれない。それじゃあ、修練にならない。だから俺は、二番目に得意な双剣を選んだ。

そこから俺たちは修練を始めた。初めは軽めに、だけどだんだんと激しく動き始めた。周囲には俺たちの掛け声と、ぶつかり合う音が鳴り響いた。

「どうした！？動きが鈍ってきてるぞ！もう疲れたとか言ってくれなよ？」

「当り前だろ。天心流剣術——崩天黒刃！」

卓也は一本の剣で同時に三連撃を叩きこんできた。その剣撃を俺は全ていなし、容赦なく手首に一撃を叩きこんだ。

「隙が多すぎるぞ！次、来い月花！」

「分かつてるよ！北竜葬送流槍術——葬竜演武！」

槍頭と石突きの方で俺にぶつけようとしたが、双剣を石突きの方にぶつけて体勢を崩した後、卓也と同じく手首に容赦なく叩きこみ武器を落とさせた。

「ほい、これで終わり。あのな、お前らそんな隙が多い技を使わなくてもいいんだよ。これが模擬戦だったからいいけど、もし実戦だったらお前らが攻撃を当てられてたのは手首じゃなくて頭か、体だ。いつでも隙は少ない方が良く。まあ、わざと隙を見せて挑発するって手段もあるけどお前らにはまだ早い」

「「はい、わかりましたよ」」

「そうふてくされるな。前にやった時よりは技の連度も実力もはるかに上がってる。そう悲嘆に暮れることはない。ま、今のまんまじや俺から一本取るのには相当時間がかかるがな」

そんな事を話していると、突然俺が敷いた結界が壊れた。何事かと思つてそちらの方を向いてみると、そこには神崎さんが立っていた。

修練（後書き）

続けて書いてみました。いや、面白くなったと思うので楽しんでください。

では、また。（＞|＜）／

EX・神崎視点

乾さんたちと別れた後、私こと神崎真由美は最上階のVIP専用ルームでくつろいでいた。今回私が日本に来た理由は、婚約者である九条泰斗さんと会うためだ。だけど、九条さんとはある事情でいま仕事に出ているのでここに到着するのは二、三日後になるらしい。

「それにしてもあの時の一体……？」

乾さんと握手した時、乾さんに一瞬、それもぼんやりとだけ白銀の色の狼が見えた。おそらくあれが神喰^{フェンリル}狼なんだろう。でも私に反応したって事は彼は――

「お嬢様、よろしいですか？」

「ええ、構わないわよ。それでどうかしたの？ギルフォード」

「彼らの動向を確認してきました。彼らは今、ホテルの裏庭のスペースで模擬戦をしているようです。詳細はわかりませんが」

「ありがとうございます。それにしても分からないってどういう事？」

「結界を張ったようでした、その向こうが見えないのです。しかも、その結界も相当な強度を持っておりまして。気づかれずに突破するのは不可能と思い、戻ってきた次第です」

「どれだけの魔力を保持しているのでしょうか？」

「ギルフォードの力を持ってしても、気づかれずに突破するのは無理と思わせるなんて」

「それはわかりかねますが。それよりもお嬢様」

「ん？何か言いたいことでもあるの？」

「はい。お嬢様は何故、彼にそこまで興味を示されるのですか？」

確かにあの若さでランカーというのは珍しいですが、全くいないわけではございません。

それはお嬢様でもわかってらっしゃるでしょう。それなのに、なぜ？」

それは当り前の疑問でしょう。おそらく彼は私と同じ純血種。そうであるが故に、あのような光景を見せたのだろう。

「ギルフォード、私は神話や伝説の武器へとその姿を変える事ができるサルジストの純血種。

そしてここからは私の想像になりますけど、彼は、乾さんはおそらくサルジストの力をふるう事が出来るクラストの純血種です。その証拠に、彼は私の持つ力に反応した」

「なんと。まだ生き残っていたのですか？

それでは彼は、最後のクラストの純血種ということになりますが：

…」

そう。私のようにサルジストはまだ少ないけれど現存している。

けれどクラストはサルジストなどと交りあうことで、その血の純血がいなくなった。純血種がこの三十年以上発見されなかったことで、クラストの純血種は絶えたのだと思っていた。でも、そうではなかった。

「それで彼らは、ホテルの裏庭にいるのね？」

「はい、そうですが……まさか彼らの所に行く気ですか？」

「そうよ。どうせこのまま待っていても暇だしね。どうせに、三日は来られないのだし」

「わかりました、が。行く前にその格好と髪をどうにかして下さい。乱れ過ぎです」

私はギルフォードの言うとおり髪を梳いて、服のしわを元に戻して裏庭に行くと、そこにはギルフォードが言っていた通り巨大な結

界が張つてあつた。

その結界に指が触れると、途端に結界は壊れて驚いた表情で立つて
いる三人がいた。あれ？

EX・神崎視点（後書き）

ギルフォードというのは、あの執事の事です。ついに10000PV突破！

やったぜ、V！それじゃあ、また今度！バイバイ！（>|<）／

喫茶店にて

ホテルにある喫茶店で俺たちは談笑していた。

結界を破壊された時は驚いたが、それは彼女の手に聖属性が混じっていたせいだった。俺がこの周辺に張った結界は闇属性。異なる属性の力に反発し、耐えきれなくなり壊れてしまったんだろう。

それでも、長時間触れていて碎けたならまだしも、彼女の顔を見るにあればただ触れてしまっただけで壊れたという感じだ。どれだけ内包量と密度が高いんだよ。

もしかしたら、さっき来てた執事さんが何かしたのかもしれないけど……。

「それで、神崎さん。どうしてあんな所に？」

「え！？えーと、相手が来てなくて散歩をしてたんですけど……」

「要するに、暇だったんでしょ？」

「……はい。その通りです」

着いたはいいけど、相手が来ていなくて散歩してたら偶然ここに着いた、か。いや、違うな。彼女は俺の事を探っている感じがする。暇はその通りなんだろうけど、こちらの事も探ろうって感じか？

まどろっこしいのも嫌だし、ここはもういつそ単刀直入に言ってくか。

「それで？神崎さん、俺に何か用があるんじゃないんですか？わざわざ執事さんを俺にけしかけるぐらいなんですから」

「……気づいてらっしゃったんですか？あれでもギルバートは元S+ランカーの実力者なんですよ？」

「それが何です？そんなことはどうでもいいんです。

大事なことは、貴方が俺にどんな用があるのか、という事なんです

から」

「……では率直にお伺いします。あなたはクラスト最後の純血種なんでしょうか？」

……やっぱりその話か。結構うんざりするな。爺たちがこの情報は隠蔽してるけど、やっぱり純血種にはわかるのかな？

「その答えはイエスとノーの両方。確かに男でクラストの純血を継いでいるのは俺一人だ。」

だが、人間の純血種が俺一人か、と訊くとそれは違う。俺には一応だが、姉と妹がいるからな」

「一応？どうして一応なんですか？」

「……姉貴はどこ行ってるのかもわからない。その上生存不明だし。妹に至っては、もう俺と同じ乾姓を名乗っていない。千葉家の養子ということになってるからな」

「数字持ち（ナンバーズ）。それも番外^{エクストラ}ですか」

「そうだよ。俺が爺たちと相談してそうしてもらったんだ。俺はまだしも、あいつはまだ未熟。」

俺の傍にいて狙われるよりは被保護者としては格式も高い数字持ち（ナンバーズ）、それも番外^{エクストラ}の方が良い」

数字持ち（ナンバーズ）とは、名字の方に一から十の数字を持つ者たちの事だ。一桁の者はファースト二桁の者はセカンド、三桁の者はサードそしてそれ以上が番外、つまりエクストラとつけられる。噂だけのレベルだが、番外の番外つまりオリジナルエクストラである零の位を持っている者がいるそうだという物もある。面倒すぎるぞ、この制度。誰が考えたんだよ。

「それは総局長の娘であるあなたが気にすることじゃないでしょう？」

「どうしてそんな事をあなたが知っているのです？」

「否定になっていませんよ。それは俺があなたの父である、神崎宏隆総局長と知り合いだから。何回かあなたのお話は聞いていますよ」

「……お父様はなんと仰っておられたんですか？」

「誰にでも気がきいて、そして優しい自分にはもったいない娘だともただ一言、構えないのが残念だと。自分は仕事にかまけてあなたに構ってあげられなかったのが、残念だと言っていましたよ」

「そうですか。お父様はそんな風に……」

神崎さんは静かに声も出さずに涙を流していた。俺たちはそれを静かに眺めていた。

喫茶店にて（後書き）

はい、今日は土曜なので昼から投稿してみました。ここ最近は説明ばかりですが、そのうち派手なバトルも入れていこうと思いますのでよろしくお願いします。

それではまた後で。あるいはまた今度。さいなら。¥（>|<）

/

模擬戦の前に

「それでどうしてこんな流れになるんですか？」

あの後、ひとしきり泣いた神崎さんは唐突に、稽古をつけてくれませんか？と言ってきた。そしていきなりさっきの裏庭まで引っ張り込まれた。卓也と月花もちやつかりついてきていた。

「私、強くなりたいんです。今回みたいに誰かに頼るだけでなく、自分の身ぐらいは自分で守れるように」

「別にそんな事をする必要はないと思いますけど。人には向き不向きという物がありますし」

「それでも、力は持っていた方が良いでしょう？いざという時のために」

「否定はしませんけどね。こういうこともありますし」

俺が足を地面に叩きつけるのと同時、ナイフが飛んできた。だがそれは、俺の足元の影から出てきた者によって阻まれ、俺は手に籠手を纏わせて飛んできた方向の木を殴った。それによって生じた衝撃波で何本か先の枝に足をつけていた男は落ちてきた。

「ばれたかからってナイフ投げなくなっただけいいじゃないですか。えーっと確か、ギルフォードさんでしたっけ？」

「……分かっておられたのですか？私がいたことを」

「もちろん、貴方の気配を立つ能力は素晴らしいの一言に尽きます。ですが、視線が強すぎます。」

あれでは方向はわからないでしょうが、監視されているのがばれればれです。

それと魔力の動向ぐらい気をつけましょう。俺が即時結界で大体半

径五百メートル程度の探査術式を使ったのにも気づかれていないようでしたし」

「「半径五百メートル!?」」

あれ? そんな驚かれるような事だっけ? …… あ、そうだった。普通の術者でも即時結界の探査術って半径二、三十メートル位だっけ。いやあ、完全に忘れてた。

「直径一キロの即時結界なんて一花様いちはなだけの技だと思ってたのに、他の人にも出来たんだ」

「あんな超人と一緒にしないでください。あの人は訓練もせずに大規模攻撃魔術の展開までできたんですよ? しかも六歳で。いくらオーデインの魂を宿してるからってチートすぎますよ」

「チート云々はリーダーにだけは言われたくないけどね」

ええい、やかましいわ。一花とは一桁ファースト数字のトップだ。

オーデインの魂を宿している魔術界の女帝。そして世界でも有数の実力者。SSSランカーだからな。ちなみにSSSランカーは世界でも三人しかない。

『一花』・『二木』・『三橋』この三人だけだ。もうやばい。こ

の三人が先頭に出るというだけで、もう絶望しか残らないらしい。いわば、最終兵器ってところかな。

「とにかく。いくら元とはいえ、こんな失態を犯してはいけないという事を言いたいんですよ。俺は」

「そうですね、わかりました。あなたもSランカーとは思えませんが」

「それはもういいです。それじゃあ、始めようか神崎さん」

「はい、お願いします。私の事は真由美って呼んでくれませんか?」

「それじゃあ、真由美さんで。参ります」

俺は日本の木刀を構え、真由美さんはレイピアのような形をした木刀を構えた。そうして同時に飛び出した。

模擬戦の前に（後書き）

はい、同日連続投稿です。できればこのまま一、二話書きたいと思っています。もう大奮発だ！。というわけで楽しんでいって下さい。

模擬試合

同時に動いた俺たちだったが、先に機先を制したのは真由美さんだった。もう何がすごいって、その突撃力と剣捌きだね。一瞬で俺の懐に入って、俺の鳩尾の部分を本気で突こうとしてきたし。殺す気かっての。ま、全部弾いたんだけど。

「護衛されてる時から感じてましたけど、さすがに強すぎじゃありません！？開幕の連撃を全部弾くなんて！」

「そりゃこっちのセリフ。なんでこんだけの実力があるのに護衛なんかいるんだよ？」

「それは……私が魔術を使えないからで……」
「……………」

なんじゃそりゃ。サルジストの純血種なのに魔術が使えないってどうよ？もしかして聖属性も自発的に使ってるわけじゃなくて、垂れ流し状態なのか？どんだけ内包量がとんでもないんだ？

魔術などの知識が世界的に知られることとなった現代において、魔術を使えない人というのは絶滅危種並みに稀少だ。火をつける魔法とかで 사용되는こともある。まあ、そのせいで犯罪も増えるんだけど。

「初歩の初歩、火の術は使えますよね？」

「それが全然だめで………なんでできないのか分からないって先生に呆れられたくらい」

「まあ、いいか。今は関係ないし。それで剣をより磨くと。それなら、もっとアクセルを上げた方が良いでしょうかね？」

「そうですね。お願いします。手加減は抜きで」

「言いましたね？後悔しないでくださいよ？月並みなセリフではあ

りますが」

俺は体の中心に小さな炎をイメージした。これが普段の俺だ。そしてその炎の火力を段々と上げていく。そんな俺の気配をあやしく思ったのか、真由美さんはレイピアを構え猛攻を仕掛けてきた。

両腕、両足、右肩、脇腹、肋骨の部分。とてつもない嵐のような猛攻、だが一発一発の威力は小さく大したダメージにはならないが量が量だ。じりじりと溜まっていく。

そんな猛攻に耐えながら、炎をイメージし続けた。そしてそれが頂点に達した時、一気に爆発させた。それは俺の体の隅々まで肉体強化の術を掛ける物だ。これによって俺の身体能力は格段に上がる。普段の五倍ほどに。

いきなり俺の姿が消えたことに驚いたのだろう。真由美さんは周りを見回していた。さっき身体能力が上がると言ったが、俺が上げたのは脚力と感覚神経。それによって俺は今——空中にいた。

いやあ、我ながら跳びすぎた。久しぶりすぎて加減が難しいな。

神崎さんの五メートルほど後ろに着地すると、神崎は驚きながら振り返った。

「いったい何をしてたんですか？」

「ちよつとした術を体にかけてた。時間かかるからね、あれ。それじゃあ改めて、始めよう」

俺は強化された脚力で真由美さんに双剣で居合抜きをした。それを真由美さんはすんでのところ回避した。鋭いな。攻守は完全に逆転した。俺の文字通り嵐のような猛攻に、真由美さんは回避することですなきを得ていた。俺の剣は真由美さんと違って重い。そんな物を連発されていたら相手としては、やっていられないだろう。

それでも何とかこちらの動きをつかみ、鳩尾を中心とし星の形で突きの五連発を浴びせてきた。そして鳩尾に掌底を食らわしてきた。

それは魔物用の魔術だった。星の加護を使い聖属性の掌底で相手の急所を突く。とんでもない技だ。

その技を放ったことで固まった真由美さんを魔力で吹き飛ばし、一本の剣を両手持ちにして大上段で斬りつけた。すると真由美さんの持っていた木刀が半ばで粉々に砕け散った。

「そこまで！勝負あり！」

月花の声が響きわたり、俺たちの模擬試合は終わった。ああ、体中が痛えなあ。

模擬試合（後書き）

はい連続投稿第三段！できたぜ！読んでくれる方も増えてうれしいです！

バンザイ！というわけで次話でまたお会いしましょう！では！

模擬戦の後

模擬戦も終わり、俺たちはなぜか最上階の真由美さんの部屋に招かれていた。……何故？

「申し訳ない。お嬢様も手加減を挑みにかかるのですから。これだけの傷を負う者も珍しいだろう言うぐらいの傷を負ってますよ」

「なんかいろんな所が痛いですから。肋骨が一本ぐらい折れてるか、ひびが入ってますね、これ」

「うっ！……すいません。ちょっと暑くなりすぎてしまっ……」

「それはもういいですよ。あなたの強さもよくわかりましたし。あなたの剣筋は我流にしては洗練されているが、流派にしては粗すぎる。あなたの剣はあなた自身が作り上げた物なんでしょう？」

「はい。向こうでは趣味としてレイピアを習っていたんですが、学んでいく内に自分で技を作り上げてみたい、と思うようになったんです。そののほぼ全てをあなたにぶつけてみました。どうでしたか？」

「確かに強い。ですがやはり魔術が使えないというのはまずすぎます。おそらくあなたが魔術を使えないのは、無意識の内に魔力を聖属性に変換して垂れ流しているからです。だから必要な魔力が足りないんです」

「へ？私の魔力って垂れ流しの状態なんですか？」

「ええ。無意識下で行われてるせいで気づかないんでしょうね。そうですね……水門をイメージして下さい。魔力の運用というのは全てイメージで賄われていますから。次に垂れ流しの状態になっているそれを閉めて水を止めるイメージをして下さい。……はい、オツケーです。垂れ流しは止まっています」

「これで魔力が溜まっていくんですか？」

「そうですね。でも、そうそう全快になることはあり得ない。回復

が早い人でもそうですね、大体三日程度かかります。あ、これはフ
エンリル所属の魔術師の基準ですから。

まあ全体量がわからないと、どうしようもないんですけどね？真由
美さんは魔力の内包量とその回復速度は一線を介していると思いま
すけどね」

彼女は魔力をほぼ垂れ流し状態で過ごしているのにも拘らず、普
通に生活している。魔力が枯渇すると、吐き気や嘔吐感に襲われる
物だから彼女の魔力総量は計り知れない。

やっぱり純血種としての力が作用しているのかな？俺もフェンリ
ル所属の魔術師の大体二十倍ぐらいあるって言われたし。

「それじゃあ、俺たちはこの辺で戻らせてもらいますね。卓也、月
花行くぞ」

「「ういーす。了解」」

「えー？まだ傷は治りきっていませんよ！？」

「大丈夫ですよ。俺の力は少々特殊ですから。それでは失礼します」

俺達は真由美さんの部屋を出た後、卓也と月花は夕食を食べに行
くと言っていたが、俺は辞退しては部屋に戻りベッドにぶっ倒れた。

今回の特務は色々あったな。まさかサルジストの純血種と会うこ
とになるとは。ま、なにせよめちゃくちゃ眠い。さっさと……寝
ると……しよう……。そして俺は眠りについた。

模擬戦の後（後書き）

連続投稿第四段！残念ながらもう日は超えてしまったが大丈夫！まだぎりぎりセーフだ！それじゃ、また今度！（>|<）ノ

去り際の一言

「そういえばリーダー。昨日リーダーの影から出てきたあの黒いのは何だったんです？」

「ん？」

翌日、俺と卓也と月花は朝食をとっていた。ああ、美味しいな。この料理。いやあ役得、役得。朝からこんな美味しい飯が食えるんだから捨てたもんじゃないな。

「ああ、あいつの事か。ちょっと待ってろ。もうすぐ説明してやるから」

「いや、それなら今すぐ説明してくれても……」

「何の話をしてるんですか？」

「おはようございます。真由美さん、ギルフォードさん」

「「おはようございます」」

二人はちょうど降りてきたようだ。ちなみに卓也飯を食うのに集中してるから、全然話に参加してこない。すると丁度よく注文していたステーキが運ばれてきた。するとそこにいた皆が怪訝そうな顔をしていた。

「朝からステーキですか？……胃にもたれそうですね」

「これを食べるのは俺じゃないからいいんですよ。」

……ほら、飯が来たぞ。そろそろ機嫌直せつて。飯を一食抜いたぐらいじゃ死にやあしねえよ」

俺が地面、というより自分の影を足でノックするように蹴ると、そこから黒い狼の形をした獣が出てきた。

出てきた時は不機嫌そうだったのに、できたてのステーキを見ると食べてもいいかと思念で訊いてきた。まったく現金な奴だ。俺がどうぞ、とジエスチャーをとるとむしゃぶりついていた。そんな腹減ってたのかよ。

「あの、リーダー？この黒い狼みたいなのは一体……？」

「俺の眷属。フェンリルってのは破壊と狼の象徴だ。

お前の槍の素材であるオリハルコンを取りに行く最中にあったんだよ。

それでこいつらの一族と契約し、俺の影に住んでるんだ。俺の命令は忠実に訊くし、いい奴だぜ？」

「それは別にいいんですけど、大丈夫なんですか？魔獣を勝手に眷属にするのは認められていないのでは？」

「あのな、お前らの武器を作ってから二年もたってたぞ？ちゃんと登録してあるさ。

それに好き好んで狼を眷属にする奴はいない。たいてい器としての力が足りず、殺されるからな」

「召喚術者（ティマー）は？あいつらならできるんじゃないの？」

召喚術、それも魔術と同時に普及してきた物だ。今じゃあ、ペットとしての契約を交わす者もいるそうだ。まあ、そりゃ確かに生存競争が難しい自然よりは安定しているだろうけど……。

「召喚術者（ティマー）が好き好んで狼と契約するわけないだろ。

あいつらは基本的に孤高の生物。

誰かに媚びる事自体が珍しい。お前、狼に真正面から睨まれて平然としてられるか？」

「無理です。だから狼を眷属にする人って全然いないんだ」

「そついう事。食べ終わったな。それじゃあ戻って寝てる。また仕事になったら呼ぶから」

黒狼はこくと首を動かすと出てきた時と同じように、俺の影に戻っていった。そのころには俺たちも朝飯を食い終わっていた。俺たちは席を立った。

「それじゃあ真由美さん。ギルフォードさん。任務も完了しましたし、俺達は帰らせていただきます。花を踊らす風が、貴方にもとどかん事を」

「ええ。ささやかな陽光があなたたちを包みますように。お元気で」

俺は一礼をした後卓也と月花と一緒に部屋に戻り、荷物をまとめてチェックアウトして車に乗り込んだ。車を動かしてちょうど街と街の境目であるトンネルに入ったところで、月花が喋りかけてきた。

「さっきの花をのあれにはどんな意味があったの？」

「前にも説明した気がするが、まあいいだろ。要するに健康でありますようにって意味の別れの言葉。」

真由美さんが言ったのは、ささやかな陽光のような幸せが包み守ってくれますように、って意味だ」

「そうなんだ。……そういえばリーダー、めったなことじゃ名前を呼ばないのに珍しいですね。何かあった訳じゃないのに」

「……まあいいだろ。少なくとも彼女と俺がまた会うなんて確率としてはそう高くないだろうし」

俺のこの甘い考えが覆されるのは、そう遠い未来ではなかった。

去り際の一言（後書き）

昨日は結構な数の読者に来ていただいたのすごいです。これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！

驚愕な一言

あの護衛任務から数日が過ぎ、俺はちょうど任務を終えて報告をしている時だった。花音ちゃんが端末に打ち込んでいた俺に話しかけてきた。電話を持って。何で電話なんか持ってたんだ？

「あの、慎也さん。支部長からお電話ですが」

「ん？はい、もしもし。ラーメン屋・楽軒ですがご注文は何でしょう？」

「ラーメンと餃子二人前で。できるだけ早く頼むぞ」

「はい、かしこまりました——じゃねえよ！何ボケに乗ってきてんだよ、ツツコミいれるかしないならスルーしろよ！つい乗っちゃまったろうが！」

「お前さん結構無茶なこといつとるぞ？」

「いいんだよ、俺だから。それで？今度は何の用なんだ？」

「いいから支部長室に來い。お客さんもお待ちかねのようじゃな」

「お客さん？また特務なのか？」

「まあ、その一環じゃな。早くこんと給料減らすぞ」

「ちよつとそれ職権乱よ——切りやがった。しゃあない。行くとするか」

俺は花音ちゃんに電話を返すと、端末の電源を落として支部長室に向かった。まさかこんな短期間で支部長室に二回も入ることになるとは。

支部長室の前にたどりつき、俺は二回ノックをして声をかけた。これはこの間と同じ。でもここからが違った。

「乾です。入室してもよろしいですか？」

「どうぞ。入ってきてください」

中から聞こえてきた声は真由美さんだった。あれ？また護衛の仕事？そんなわけないよな。あれ？何だろ？そんな風に疑問で頭をいっぱいにしながら、俺は支部長室に入室した。

「お久しぶりですね。お元気でしたか？」

「数日ではそう変わりはありませんよ。真由美さんこそ今回はどういった御用で？」

「少しお話がありまして。どうぞ席にお掛け下さい」

「あ、これはどうも。……それでお話とは？」

「えーと、その……」

真由美さんが喋りにくそうにしているな。いったいどんな話なんだ？しばらく待っていると、真由美さんは意を決したかのような表情になって驚愕なセリフを放り出した。

「乾さん。私と婚約してくれませんか？」

ナニライツ テイルンダロウコノヒトハ？

驚愕な一言（後書き）

昨日は諸事情により更新できませんでした。すいません！その代り今日は二つ更新するつもりです。よろしく！

事前交渉

「ええええー！ー！ー！？」

俺はすつとんきょうな声を上げていた。だ、だってしょうがないだろう！いきなり『婚約してくれませんか』だぜ？しょうがないだろ！？

「おい、爺！これは一体どういう事なんだよ！？」

取り敢えずクソ爺——もとい。支部長に助けを求めた。ところが支部長も顔が歪んでいた。え？もしかしてあんたも、真由美さんがこんなことを言うとは思わなかった派なの？

「ああー。真由美くん？少し詳細を話してもらってもいいかの？」

「はい。乾さんはクラストの純血種だと訊きました。私もサルジストの純血種です。

なので、婚約して下さいませんか？と申したんです」

うん。見事に話がわからない。っていうか全然話がかみ合っていない。意味わかんねえ……。

「いやいや、待て待て。キミの婚約者は九条君じゃろ？他の男と婚約などできる訳ないじゃろ」

「婚約は解消していただきました。とある条件付きで」

「条件って何なんですか？」

「九条さんが今度行われるトーナメントで優勝したら、もう一度婚約関係に戻る、という事です」

「というよりもなんで俺と婚約なんてするんです？」

九条といったら一桁数字でしょう？家柄もバツチリ、実力もあつて言う事無しじゃないですか。なんでその婚約を断って俺なんかと婚約するんです？」

「あなたはクラストの純血種というのが、どういう意味か分かっていない。その血がどれだけ稀少か」

——ガンツ——！！

俺は目の前にあつた机を叩いて立ちあがった。ひょっとしてふざけてるのか？この人は？

「俺はこの血を保つための入れ物じゃない！俺は俺だ！この血が滅びた処であなたにとつてはどうでもいい事でしょう？最初から無かつた事になるだけなのだから」

「……すいません。失言でした。話はもう少しで終わりますから、もう少し辛抱してただけませんか？」

「それで、貴女は俺にどうしてほしいんです？俺にそのトーナメントに出るとでも？あれは世界中の人が予選に勝ち残って出る物でしょう？今からでは遅すぎるでしょう」

「そこで支部長にお願いがあります。確か東京支部は前回の大会でベスト4に入っていましたよね？」

「ああ、そういう事か。ベスト4に入った支部は次の大会で一人だけ特別選手を選ぶ事が出来る権限を得る。それを使ってこやつを出せ、と？」

ファーストランバー

「はい。それにこの大会で優勝すれば、一桁数字の人に挑戦する権利を得ることができます。いかがでしょうか？出ていただけますか？」

「やりましょう。優勝すれば俺は一花と戦える権利を得られるんでしょう？それなら、俺は一向にかまいません」

「それでは交渉成立、という事で。ちなみに優勝したら婚約しても

「いますから」

それは結構嫌なんだけど。まあ仕方ない。一花と戦う権利を得られなければ、と俺はうなずいていた。結構嫌そうな顔をしながら。

事前交渉（後書き）

短いかもしれませんが二話目の連続投稿です。

ここからは『世界代表トーナメント編』の開始です。どうぞお楽しみください。

帰宅（１）

「それでどうしてこうなったんだ？」

話し合いも終わり、俺は久しぶりに家に戻ってきた。俺は基本的
に家にいない。俺が受ける任務は、大体泊まりがけな物が多い。そ
こまでは別にいい。いつもの事だからな。

「なんであなたが俺の家にいるんですか！？真由美さん！」

「え？何かおかしいですか？」

「いやおかしすぎでしょ！俺とあなたは少なくともまだ、婚約者で
も何でもないんですから！」

「じゃあ泊めて下さい。宿泊とかお世話になるつもりだったので」

「俺の家は宿泊施設じゃないですよ！？」

何考えてるんだこの人は？あり得ないけど、もし間違いとかが起
こつたらどうするんだ？

それとも前の婚約者さんが相当な紳士だったのか？しかしギル
フォードさんも止めるとかしようよ。なんで普通にOK出しちゃっ
てんの！？

そんな事を考えていると、玄関が開く音がした。このタイミング
でドアが開くという事はまさか！？

「ただいま、兄さん。あれ？お客様？邪魔だったら部屋にひっこ
んどくけど？」

「頼むから残ってくれ。明美。あけみ後この人をお客さんとは俺認めてな
いから」

「ふーん。まあどうでもいいけどね。はじめまして、千葉明美ちはあけみと申
します。といっても旧姓は乾ですけどね」

「あ、これはどうもご丁寧に。はじめまして、神崎真由美と申します」

「もう聞いちゃいないな。神崎さん、客間でいいですか？基本的に用事があったら、明美に言ってください。俺は基本的に地下にこもってるので」

「地下？この家、地下もあるんですか？」

「正確に言うと地下じゃないというか……。それは置いて、客間はこちらです。明美、お前自分の部屋片付けとけよ。お前この家に自分の荷物を送ってくるな。面倒だからな」

「でもあの家には置いとけないし。それにいいじゃん。もうすぐ私もこの家に戻ってくるんだし」

そういう問題じゃないんだけどな。俺の家はどこにでもありそうな二階建ての家だ。

ユニットバスに洗面所と客間。それに俺と明美と姉貴の部屋。もう使われてないけど、両親の部屋。あと台所と居間。他はほとんど物置状態だ。

そんな事を考えていると、客間に到着した。俺が客間のふすまを開けると、そこは和室になっていた。両親がこの家を建てる時に客間は和室にする、と言ってこうなっただけらしい。

「はい、到着。まあ、基本的に好きにしてもらっても結構です。なんせ全然使いませんからね。俺はお客さんとか基本的に呼ばないし、明美は千葉家に行ってますからね」

「あ、その事を聞こうと思ってたんですよ。どうして千葉家に行ってる妹さんが、この家に戻ってきてるんです？」

「この時期だからですよ。大事な行事があると、千葉家は忙しくなりますから。それで帰郷ってか感じで戻ってくるんですよ。それにもうすぐ期限ですしね」

「期限？何か約束でもしてるんですか？」

「明美が千葉家に行ったのは小学四年の時でその当時、俺は高校生でした。」

俺の力と財力で二人分の学費を捻りだすのは不可能に近かった。

そこで俺が大学を卒業し、社会人となって養えるようになったら、明美を乾家に戻すっていう約束をしたんですよ」

「なるほど。あれ？でも確かお姉さんがいらっしやったのでは……？」

言えないよな。もうその当時から行方不明だったとは。正直な話、行方不明なのはいつもの事だったから搜索願とか出してないしな。たまにふらっと絵手紙をよこすけど、それどこのだよみたいな絵手紙だからな。ぶっちゃけ全然場所がわからん。

そんな事を考えていると、ちょうどチャイムの戸が鳴り響いた。宅配便かなんかか？

「兄さん。お客さんだよ。それも超大物」

は？超大物のお客さん？しかも俺に？いたい誰だろうと思いつつ、俺は玄関に向かった。

帰宅（１）（後書き）

全く関係ない話が後もう少し続きますがご容赦ください。もう数話で戦闘シーンも入れていきたいと思えます。それでは後程、また会いましょう。では！

帰宅（2）

「なるほどな。確かにお前の言う通り、超大物だったな」

「でしよ〜？ いやあ、ドアを開いたときは驚いたわよ。え！？なんでここに！？ってかんじでさ」

「それでどうしてあなたたちがここにいます！？」一花さん、二木さん、三橋さん！」

「え？一度君の家について見ようかなと思ったから」

「まずい物でも置いてあるのならまだしも、別に構わないだろう？」

「それに連絡なんか入れたら、断られるのは目に見えているしサプライズ的な？」

なんだその理由は……。この三人は一桁数字のトップ。SSSランクだ。

前に説明した一花花連さん。二木御剣さん。三橋白枝さん。この三人だ。

基本的にこの三人が戦闘に出てくる事はない。ほとんど行事ごとにしか出てこれない。いや、出れないと言った方が正しいか。力が強大すぎて同じ前線に建てる人がいないからだ。

三人は神の魂をその身に宿す者だ。

一花さんは北欧の主神、オーディンの魂を。

二木さんはギリシャ神話のオリュンポス十二神のトップ・ゼウス

を。

三橋さんは日本神話のトップ・天照大神を。

それぞれの魂を宿している。そして前に単語だけ出てきた神話兵器も持っている。

一花さんはグングニルとニールングの指輪を。

二木さんは雷霆と金剛の鎌を。

三橋さんは天叢雲剣を。それぞれ持っている。

「それで部屋はどうするつもりなんです？この家に三人も泊める部屋はありませんよ。客間は真由美さんがいるし」

「それなら花連と白枝を神崎嬢と一緒に客室にして。私がお前の部屋で寝る。これでどうだ？」

「どうだ？じゃないでしょ……。客間はあいにく二人までです。そこまで広くないし」

「それなら妹君か姉君の部屋に分けるといふのは……」

「明美の部屋は荷物満載だし、姉貴の部屋はそもそも俺じゃ開けられない。なんか術式かけてるからな。そうでなくても入ろうとは思わんが」

「それではどうすればいいのだ？」

「出て行ってもらうのが一番早いんですが……。しょうがない。あの部屋を開けるとするか」

「あの部屋とはどの部屋の事だ？」

「今は亡き……両親の部屋ですよ。掃除以外では開けたことないんですけどね」

俺は一花さんと三橋さんを両親の部屋まで案内した。両親の部屋のドアに手を掛けると――

――ドクンッ！！！！

きたよ。この肺を絞められる感じ。両親を失われた時から出てる俺の発作だ。その息苦しさを意志の力でねじ伏せ、ドアを開いた。そこには少し埃っぽいが、それでも昔と同じ状態であった。俺は少し安堵しながら、三人を招き入れて即座に部屋を出た。同時に発作も止まった。

「どうかしたんですか？」

「ちょっとした発作でね。息できなかったんですよ。ちょっと待って下さい」

「うん。それでここ使ってもいいの？」

「……構いません。使われた方が両親は喜ぶと思いますから」

「できるだけ、そのままにしておくね。ここは時間維持の魔術がかかってるから無駄みたいだけど」

分かったのか。さすがだなと思いつつ、なぜか俺は気を失った。

帰宅（２）（後書き）

二番目の投稿です。面白いとよいのですが。それではもう一、二話
いじょうともいます。では。

地下施設

眼を覚ますとそこは、居間のソファの上だった。意識を失う寸前の事を思い出し、ため息をついた。体を起こすと、明美が立っていた。

「起きた？兄さん」

「なんとかな。俺どんぐらい寝てた？」

「一時間ぐらいだよ。もうすぐご飯もできるから早く動いてよ」

「ご飯？誰が作ってるんだ？お前……なわけないか。それじゃあ二木さんか？あの人の料理めちゃうくちゃ美味いからな」

「本人を目の前でそこまで言わなくてもいいじゃん。作ってるのは三橋さんだよ。試食させてもらったけど、なかなか美味しかったよ」

あの人料理できたんだ……。俺はなぜかそんな微妙な所にシヨツクを受けていた。そして食卓の方を見ると、確かに食欲をそそる匂いがした。これは期待できるかもしれないな。

そんな事を考えていた数時間後、俺はコーヒーを淹れていた。めちゃくちゃ美味かった。二木さんのと遜色が無いぐらい美味かった。俺は淹れたコーヒーを持って階段の最初の段の所で止まり、地面を叩いた。魔力を纏わせてな。すると地面から不思議な扉が出てきた。そこをくぐると、俺の研究施設がある。

あの扉は、この地下の空間のゲートの役割を担っている。このゲートを出現させるには、ある一定量の魔力を纏わせて地面を蹴る必要がある。多すぎても少なすぎてもだめ。通った後には、あのゲートは消える。

俺はコーヒーをすすりながら研究所の扉を開けて椅子に座った。目の前に置いてある資料を眺め始めた。ついこの間、支部長にもらった資料だ。タイトルは『新魔法の開発の危険性について』。

ここは別に俺が作った訳じゃない。ここを作ったのは俺の両親、
乾莞爾いぬいかんじと乾瑛美いぬいえいみ。両親とはある魔術の研究の為に、この研究所を作
った。

俺がちょうどコーヒを飲み終えたところにゲートが開き、明美が
入ってきた。何の用だ？

「兄さん、ちよつといいかな？」

「ん？何か用か？明美。っていうか皆には伝えてあるのか？ここ
にいるって」

「もちろんしてきたわよ。それでさ、ちよつと相手してくれない？
どれだけ兄さんに近づけたか、知りたいし」

「構わんど。武器は持ってきてんのか？」

「模擬戦みたいなものなんだから、木刀でいいでしょう？」

「真剣で来られても困るがな。多分折っちまうから」

俺は拳から音を鳴らしながら、修練場に向かった。明美は木刀を
下げながらついてきた。

地下施設（後書き）

はいここまで行きました。次の話では妹・明美との試合です。最も試合では終わりませんが、（にやり）というわけでお楽しみに！

妹との対戦

「それじゃあ準備はいいか？」

「いつでもOKだよ。兄さんこそ籠手と木刀だけでいいの？」

「まずは様子見。前は開放させるまではいたらなかっただろう？お前がどれだけ成長したかも知りたいしな」

「その考えをすぐ否定させてあげるよ」

俺は木刀を二本と籠手を顕現させ、明美も木刀を二本構えていたが、こちらは背中さらに二本引っさげていた。どれだけ使う気だよ。

俺たちは同時に構えてそれから一分近く、固まったままだった。動き出したのも同時だった。

俺は単純に振り下ろし、明美は突いてきた。力のかかるところを突かれた所為で、俺の態勢が崩された。

こんな隙だらけな状態を攻撃しないわけがない。予想通り明美は突っ込んできた。俺はバックステップの要領で蹴りを顎に叩きこもうとした。

もちろん千葉家でてほきを受けているんだろう。地面を蹴って後ろに下がってかわした。面倒くさいな。

「さすがは『てんおうけん天皇剣』と恐れられてる千葉家だな。戦闘をよく理解してる。あそこに住んでいるのは伊達じゃない、ってことか。成長してるよ。確かにな」

「いや、普通に攻撃してる人に言われても説得力無いし。それに顔が余裕で満ち溢れてるよ」

「この程度で一撃もらうような、甘い鍛えかたはしてないからな。それにしても楽しいな。まさかここまでしてやられるとは」

俺はもう一度動き始めた。さっきは直線だったが今度はジグザグに。あいつにはもう、俺が地面を蹴っている所しか見えていないだろう。今回は身体強化の術をかけているからだ。

俺は強烈な突きをものすごい速度で放った。ぎりぎりの所で気づいたんだろう。木刀で受け流しつつ、もう一本の剣で撃ちこんできた。

確かに技術としては凄い。だが、そんな物を俺が許すわけがない。膂力だけで吹き飛ばした。その勢いに乗り、一気に後ろに後退した。

「兄さんいきなり本気出し過ぎだよ。左手痺れちゃったよ。これは私も本気を出さないわけにはいかないね」

「ほう、俺に手加減できるぐらい余裕だったと。それならもつとギアを上げた方が良くないかな？」

「そういう問題じゃないんだけど、ね」

何をするかと思えば、背中にかけていた二本の木刀と片手に持っていたものと吹き飛ばされたもう一本が震えだし、明美の両手に集まりだした。ちょうど獣の爪のように。

おそらく魔力で連動させてるんだろう。そしておそらくその剣の軌道は自由自在。どうやっても読めないだろう。なるほど確かに剣士にこれは致命的だな。突き、払い、薙ぎ、捌く。これがより難しくなるのだから。

「だけど甘い。その程度分らない筈が無いだろう。天衣無縫と謳われていた母さんに剣を教わっていた俺が」

「そうだね。私も兄さんも母さんと同じ千葉家の血が流れてる。そして母さんはその純血で歴代最強の剣士だった。その母さんに直接教わっていた兄さんにはぬるいだろうね。それでも！」

明美は剣を連続で撃ちこんできた。俺はその全てを弾き続けた。

そして千日手のように果てしない打ち合いが続いた。だけど、体力ではなく振るっていた剣の方に限界が来た。

そりゃあ、本来の剣の二倍だからダメージ量が蓄積されてだろう。俺の力を受け止めてるってのもあるしな。俺の木刀に本がほぼ同時に碎け散った。

好機と見たか、俺に同時に打ち込んできた。俺は鎧を顕現させて同時の攻撃を全て捌いた。まさか全て捌かれるとは思っていなかったのか、隙だらけになった。

俺は拳の力で空間をふるわせることで、明美を気絶させた。ふう、まさかこんな力を使うはめになるとは。俺は気絶しているが、楽しそうな顔をしている明美の頬をなでた。

妹との対戦（後書き）

はい、兄VS妹の構図でやってみました。最後が簡単すぎるだろうか文句はあるでしょうが、楽しければそれでよし！なので面白ければOKです。できればもう一話できればいいなと思います。では！

家族の談話

「あれ？ここは？」

俺は研究室のソファで寝かせて、俺は資料を読んでいたんだがどうやら起きたようだ。

「起きたか。具合はどうだ？」

「あ、兄さん。ちょっと気分が悪い以外は何もないよ」

「それならよかった。ほい、ちょっと冷めちまってるが紅茶だ」

「あ、ありがとう。……ところで兄さん。最後に使ったあの技は何？」

「ああ、あれか。あれは震脚の要領で作った技なんだがな。そうだな『空震』ってところかな？」

「鎧通しじゃないから何かと思ったら、新技？全くあきれちゃうわね」

声は軽いけどな。こうして明美と試合をするのは、正月以来だ。丁度今は五月。大体四力月ぶりってところか。……あんまり時間経ってないな。

しかし千葉家に預けたのは間違いじゃなかったか。ここまで育つとはな。あそこは政治にあまり興味が無い。^{エクストラ}番外と呼んでいるのも外部だけで、あそこの本来の呼び名は『天皇剣』だしな。

「お前こそなんだ？あの技は。柄尻と魔力によって連結されてるところはわかったんだが……」

「大体それで正解だよ。あとは私の技量の問題になる、って言われたしね。まあ、兄さんの鎧姿も見れたし、これはこれで満足だけだね」

「そうかい。お前に鎧姿を見られる日が来るとはな。これも時の流れってもののなか」

「兄さん、ちょっと爺くさいよ。そんなこと言っていると禿げるよ?」

「禿げねえよ! 全く失礼な奴だな。それでもお前は強くなったよ。母さんだつて誇らしく思ってるさ」

「……ほんとにそう思う?」

「思うよ。俺が母さんや父さんの事で、嘘なんかつく訳無いだろ。お前は誇つていいんだよ」

「……うん」

そういうと、明美は静かに泣き始めた。俺は隣に座つて静かに頭をなでた。すると声を上げて泣き始めた。それでも俺は静かに撫で続けた。

「ありがとう、兄さん。いま思い出したけど、私今度のトーナメントに出るんだ。よかったら見に来てね」

「それ、俺も出る事になった。とある依頼でな」

「それじゃあ、もしかしたら予選で当たるかもしれないね」

「いや、それはない。支部長推薦で予選突破のシード状態から始まるらしい」

「ええー。なんかずるーい。それ誰からの依頼なの?」

「さすがにそれは言えないな。まあ、お前の試合は応援してやるから。頑張つて本戦まで残れよ」

「ぶうー。分かつてるよ。兄さんも本戦で負けないようにね!」

「俺が負ける訳無いだろ。優勝者にはエキシビジョンマッチの権利が得られるらしいからな」

「エキシビジョンマッチって……やっぱりファーストランバー桁数字の?」

「そりゃそうだ。俺がそれ以外で燃える訳無いだろ?」

「ああ、そりゃそうだね。やっぱり本命は一花さん狙い?」

「あの人ほど強いのはそう多くいないしな。当面やっぱり一花さん

かな」

「ふーん。まあ頑張つて。それじゃあお先に。おやすみ」

「ああ、おやすみ。お前明日学校だっけ。それじゃあ朝食用意して
いてやるよ」

わーい、とか喜びながらゲートを開いて帰っていた。俺はこの後、
日付が変わるまで研究室にこもって魔術の研究をした後、自分の部
屋に戻って寝た。ちよつと二木さんを蹴ってしまった事は秘密だ。

家族の談話（後書き）

今日はこれで終わりですが面白かったらいいな、と思います。それではまた明日も頑張っていきましょう！僕も頑張ろうと思いますので。では！（>|<）ノ

予選初日

あれから数日が経ち、この日を迎えた。そう。トーナメント当日を。とはいっても今日は予選だけなんだけど。

「皆さん、お待たせいたしました。ここに世界代表トーナメントの開会を、宣言致します！」

「『ウオオオオオオー……ッ!!』」

こういう行事ことの為だけに作られた国立の特別ドームに、もう隅から隅まで人、人の山だ。ちなみにこのドームは最高十万人近くの人を収容できるらしい。

そんな事を言っている俺は現在、特別選手用の席に着いていた。

今日一日、ここから見ているとの御達しだ。面倒だな。

「面倒くさそうな顔してるね。そんなにここに居るのが嫌なのかい？」

「確かに面倒だけど、別に嫌って訳じゃないよ。そういうお前は平気なのかい？レジル」

「そりゃあ僕だつて暇だけど、まあ役得つて事でいいんじゃない？ こちらの手の内を明かさずに、相手の実力がわかるんだから」

「何か黒いぞ。大体ここに選ばれる人間は、そもそも能力も実力もばれてるだろう。」

「なあ、そうじゃないかい？『四元素』殿？」

「その呼び名は嫌いだよ。そんなこと言つてゐるなら僕もこう呼んじやうよ？」
『白銀の神狼』君つてさ」

「ああ、それは御免だな。ところでどうしてここに俺ら三人しかないと思う？つていうか黙つてないでお前も喋れよ。ジェルザ」

「別にいいでしょ？ 静かにしてたつて。 っていうかレジルはまだし

も、なんで慎也もいるわけ？」

「……ちよつと事情があつてな。そこはあまり突っ込まないでくれ」
「そう。それなら構わないわ。もう始まるわよ。ちゃんと見てなさい」

「ヘイヘイ、わかりましたよ、つと」

この二人は前回大会で四位と三位になったレジル・ハルベスと、ジェルザ・ヘレウス。とある任務で一緒になって、そこで話して意気投合した。今じゃすっかり友達だよ。

レジルの二つ名は今説明した通り『フォースエレメント四元素』。四元素、つまり炎、水、風、土の属性を自由に操り、混合させたりして使う所からその二つ名がついた。

ジェルザは『フェルミウメルナ黒銀鉄鎖』。文字通り黒銀色の鎖をもつ自由自在に操る技術を有している。

俺はもうまんま過ぎだろという『フェンリル白銀の神狼』だ。俺が鎧を纏つて走る姿から、神喰狼が連想で来たから付いた、そうだ。そりゃ神喰狼身エンリルに宿してますから……。

予選はバトルロワイヤルによる数減らしと一対一の試合形式のこの二つを行うらしい。この予選参加者、千人ほどいるらしいからな。縛りが特に無い所為らしいが。

「お、彼女とか強そうだね。あそこで双剣使ってる彼女」

「ん？……ああ、ありや俺の妹だ。おい見ろよ、あの盾持ち。ひよつとして『ガードナー無敵防御』じゃないか？」

「え？あ、ほんとだ。彼の防御破るのって難しいんだよね。ああ、可哀そうに。向かっていた人達皆、吹き飛ばされてるよ。あれ攻撃全部跳ね返すからなあ」

「ある意味チートだよな。まあ跳ね返せるのが物理攻撃だけなのが唯一の救いだが……」

「そうだねえ。ねえジェルザ、あれ誰かわかる？あの黒い剣振るっ

てるの」

「あれは『黒帝剣』でしょ？さすがは世界代表トーナメント。今年は一段とレベルが高いわね」

「ああ。ざっと見ただけでも、有名な奴らが大量にいるし。これ何人になるまでやるんだっけ？」

「確か僕たちシード組合わせて三十二名だから……二十八人だね」

「この分なら早く終わりそうだな。本戦の方が時間かかりそうだし。予選三日、本戦を一週間ぐらいかけてやるんだっけ？」

「そうね。そうそう簡単に負けないでよ？あんたらと戦える機会なんてそうそう無いんだから」

「もちろん。あたりまえだろ（でしょ）？」

俺たちは予選の観戦を尻目にこんな約束をしていた。結局この日は最後まで、最後の残る一人は来なかった。いったい何があつたんだろ？

予選初日（後書き）

できるだけ毎日一本のペースで書いていこうと思いますので、よろしく願います。昨日のユニーク数が百人を突破して気分がハイになってるあかつき입니다。

そんなわけで始まりましたよ、世界代表トーナメント。主人公や仲間たちの活躍を描いていこうと思いますので、どうぞお楽しみください。それでは、アディオス！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3483y/>

白銀の鎧と黄金の剣

2011年11月24日21時46分発行